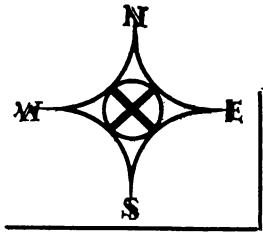
OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北陸の農村保健所から
Author(s)	竹内, 駿男
Citation	大阪公衆衛生. 1964, 14, p. 20-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



北陸の農村保健所から

大阪の某保健所長とお話したとき，福井県は石川県のむこうかときかれて，大へんショックを受けたことがあります。大阪発９時33分の急行「ゆのくに」に乗れば，福井県の玄関敦賀市は僅か２時間８分のところにありますが，大阪と敦賀との隔りは２時間８分ではあらわせないものがあるのでしょう。昭和19年創設以来の保健所の陋屋は雨もりがひどく，狭い事務室に34名の職員がひしめき，耐用年数をこえたライトバーンはときどき故障をおこします。

併し，職員は純朴で誠実があり，ほんの１～２年と思って来た私をすっかり敦賀っ子にしてしまいました。私達は先づ広く会議をおこし，大いに議論し，自主的に事を決めることからはじめました。月１回の事務担当者会議は職場内の不満の解決から次第に建設的な方向にすすみ，職員の研修の場となり，職員の士気は県内随一の保健所と自他共に許される様になりました。

又，私達が阪大公衆衛生学教室の支援によってはじめた三方町の保健計画も一進一退しながら，３カ年を経て漸く根をおろしはじめました。人もいない，予算もない，器材もない，といった状態から人も訓練され，心電計もととのえ，予算もやりくりし，土地の人とも親しくなり，困った困ったと相談したり，励ましあって，一歩一歩進んできました。

農村での活動は無知との斗い，封建性との斗い，農民を理解し，農民と協力して，而も自分は田舎者になりきらない改革者でなければならないといった先達の言葉をかみしめながら，ともすればひるみ勝ちな自分に鞭うっています。

大阪の皆さんのかわらない友情と御支援を心からお願いします。

（敦賀保健所　竹内駿男）